

志賀直哉旧居 奈良学園公開文化講座(2024 年前期)

第 67 回 《『源氏物語』を読む——桐壺巻①——》

2024 年 3 月 27 日 (水) 14:00~16:00 講師 鍵本有理 奈良学園大学人間教育学部准教授

古典文学の中でも人気の高い『源氏物語』。今年は「桐壺巻」から、名場面を 3 回に分けて読むこととします。初回は源氏物語を読むための基本的な知識（全体の構成や主要な登場人物など）についてお話ししたのち、有名な冒頭部から桐壺更衣の死までを見ていきます。2 回目以降は残された若君と帝の様子、藤壺女御の登場と源氏の元服などについて取り上げます。実際に原文を読みながら古典の面白さを味わっていきましょう。

第 68 回 《古武道へのいざない》

2024 年 4 月 22 日 (月) 14:00~16:00 講師 柳生久志 武神館古武道最高位師範

武神館古武道では、素手の技から入り、剣、棒、槍、薙刀、十手、手駒など様々な武器を使った組手稽古が中心である。古武道は、現代の武道の元となった伝統武芸であり、古の護身術のようなものが型として残されてきたもの。流派の内容は、戸隠流忍法体術、玉虎流骨指術、九鬼神伝流八方秘劍術などである。海外の軍や警察関係者が日本で修得して自国で広めたことから全世界に広がっているが、日本人達にこそ関心をもってもらいたいと考えている。

第 69 回 《菓子の歴史とこぼれ話》

2024 年 5 月 27 日 (月) 14:00~16:00 講師 菊屋英寿(えいじゅ) 御菓子司 本家菊屋 二十六代目

何かと始まりの奈良、菓子も奈良が発祥になります。そんな菓子にまつわるこぼれ話をさせて頂きたいと思います。菓子の始まりは果物、神様にお供えした柑橘類で日本固有種の「大和橘」は奈良を舞台にした伝承があります。御祝の席に使われる紅白上用饅頭も奈良で始まりましたし、鶯餅の原型も奈良が発祥です。菓子屋の亭主の話をお気楽に聞いて頂ければ幸いです。

第 70 回 《国宝と関わって》

2024 年 6 月 10 日 (月) 14:00~16:00 講師 小西正文 興福寺国宝館・元館長

興福寺国宝館などの仏像、絵画、工芸品など奈良の古文化財の保存、修復についての四方山話を中心に、奈良の古美術の鑑賞、管理の長年の経験に基づく、要点とその意義を広い視野に立って座談風で披露する。

第 71 回 《『源氏物語』を読む——桐壺巻②——》

2024 年 6 月 26 日 (水) 14:00~16:00 講師 鍵本有理 奈良学園大学人間教育学部准教授

3 月の講座に引き続き、『源氏物語』の「桐壺巻」を取り上げます。今回は桐壺更衣の死後、悲嘆に暮れる帝や更衣の母の様子と、若君(のちの源氏)の成長ぶりについて読み進めることとします。また、大河ドラマにちなんで、作者紫式部に関するエピソードも適宜紹介していきます。

◆参加費	各回 350 円 入館料込 (奈良学園教職員、在籍者は無料です)
◆定員	各回 25 名 (事前申込先着順) ※定員になり次第、申込を締め切ります
◆会場	志賀直哉旧居 (奈良学園セミナーハウス) 奈良市高畑町 1237-2
◆申込	志賀直哉旧居 (0742-26-6490) (seminar@naragakuen.jp) にお申し込みください
◆主催	学校法人奈良学園志賀直哉旧居 (奈良学園セミナーハウス)



志賀直哉旧居 HP

作品と作家の手



災厄続きの近年に、昨今、どこか不安がよぎります。幾多の困難を越え、今日に、古都は、なお類まれな文化の輝きを伝えてくれます。古都の安寧を願うばかりです。

このような時勢であれば、なおさら、人間の創造的営みに、心静かに向かい合いたくなります。今季は、この創造的な営みを作家の手にたどってみます。

5月20日(月) 14時~15時30分

「志賀直哉と谷崎潤一郎の文学にみるもの」 呉谷充利 建築史家・相愛大学名誉教授

父子の対立を見た明治末から昭和に至る作家の中に志賀と谷崎がいる。その深刻な葛藤から、志賀は東洋の古美術に惹かれて『座右宝』を編輯し、谷崎は「刺青」に綴る自らの審美の世界へと馳せている。この二人の文学者は、同様な葛藤を持ちながらも、対照的な美の世界を見せる。その二つの美が意味する世界について、考えてみたい。

6月17日(月) 14時~15時30分

「夏目漱石『思い出す事など』—『三十分の死』がもたらしたもの—」 吉川仁子 奈良女子大学文学部准教授

志賀直哉が敬愛した夏目漱石の随筆「思い出す事など」を読みます。漱石は、明治43年「門」の連載終了後、胃潰瘍の転地療養で訪れた修善寺温泉で病状が悪化し、8月24日夜、500グラムの吐血をして人事不省となり、危篤に陥りました。懸命の治療の結果持ち直し、10月になって帰京しますが、「思い出す事など」は、この「修善寺の大患」と呼ばれる病中の体験と、病によって享け得た長閑な心持の記録です。漱石が、自らの生命の危機をどのように振り返り、何を感じ、生と死についてどう考えたのか、たどってみましょう。

7月15日(祝・月) 14時~15時30分

「王子さまはなぜ来た道を戻らないのか—『星の王子さま』をめぐる—」 東浦弘樹 劇作家・関西学院大学教授

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』はおそらく日本で最もよく知られたフランスの文学作品でしょう。本講座では、なぜ王子さまは自分の星に帰るのに自分を毒蛇に噛ませるなどという危険で不確かな方法をとるのか、なぜ来た道を戻らないのかという素朴な疑問を、作者の生涯や文化人類学的な考察も踏まえつつ考えてみたいと思います。

9月16日(祝・月) 14時~15時30分

「泉鏡花の戯曲『夜叉ケ池』を読む」 西尾元伸 帝塚山大学教授

『夜叉ケ池』(大正2)は、「越前国三国ヶ嶽の麓、鹿見村琴弾谷」の里を舞台とした戯曲作品です。この地には、昔、龍神が「夜叉ケ池」に封じ込められたという伝説があり、萩原晃はその言い伝えを守って、一日三度の鐘撞きを続けています。作品は、この里を萩原の親友・山沢学円が訪れるところから展開していくこととなります。作者・泉鏡花は、小説、随筆、戯曲など、さまざまなジャンルにおいて幻想的な作品を書いた作家です。本講座では、戯曲という形態で書かれていることに留意しながら、鏡花戯曲の代表作と言える『夜叉ケ池』について、その幻想性と魅力とを読み解いてみたいと思います。

10月21日(月) 14時~15時30分

「飛鳥園小川晴暘とその周辺」 三浦敬任 奈良県立美術館

本講座は奈良県立美術館で2024年4月20日から6月23日まで開催された特別展「小川晴暘と飛鳥園100年の旅」に関わる作品および資料から、奈良で仏像写真館飛鳥園を立ち上げた小川晴暘の事績とその人となりを紹介します。

姫路に生まれ、写真を学びつつも画家を志して上京していた小川晴暘が、奈良の仏像や文化遺産に魅せられて関西に戻り、写真の道を歩みはじめ、會津八一との出会いから始まった飛鳥園の歴史。歴史的文化財の記録、学術的資料という枠を超えて、信仰の対象である仏教美術の本質をレンズ越しに捉え、美術的写真表現の魅力と完成度を併せ持った写真として表現し続けてきた飛鳥園の活動を紹介します。

小川晴暘は写真以外にも絵画、スケッチ、拓本、日記など様々な記録と表現でその活動を残しました。また、その活躍の範囲も日本を超えて中国、朝鮮半島、アジアの各地域へと広がる旺盛なもの知られます。残された膨大な記録や出版物などの資料をひもときながら、晴暘の活動が果たした功績に迫ります。

11月18日(月) 14時~15時30分

「大正、昭和初期の奈良の美術について」 平瀬礼太 美術史家・愛知県美術館 副館長

奈良の近代美術について、前回は明治期について取り上げました。今回は引続き、大正期・昭和初期における奈良の美術動向について解説します。当時の奈良の地は、その景勝と文化が織りなす独特の雰囲気引き付けられた美術作家たちが、モチーフを得るために訪れ、さらには移り住む美術作家たちもあらわれたという時期にあたります。小説家など多くの文化人との交流も生まれ、一種の芸術家コロニーも成立していました。その独自性に触れてみたいと思います。

<参加費>各回 350円 入館料込 定員 25名(申込先着順)
<申込先>学校法人奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居
奈良市高畑町1237-2 TEL/FAX:0742-26-6490
E-mail: seminar@naragakuen.jp



志賀直哉旧居 HP